

## 第3章 鹿児島紡績所

### はじめに

グラバー商会 (Glover & Co.) の力を借り、奄美大島の機械式製糖工場を建設していた時期とほぼ平行して、薩摩藩はイギリス製の紡績機械、力織機を装備した洋式紡績工場を鹿児島城下、集成館の工場群に近接して建設している。鹿児島紡績所と呼ばれるこの紡績工場は慶応3 (1867) 年に操業を開始したが、明治30 (1897) 年に廃止され、建物も後に取り壊された。現在は工場の跡地に記念碑や門柱の笠石が置かれている。また、異人館と呼ばれる外国人技術者の洋風宿舎が、昭和37 (1962) 年に国の重要文化財の指定を受けて保存されている<sup>1)</sup>。

明治3 (1870) 年に開業した堺紡績所、同5年開業の鹿島紡績所と並び、「始祖三紡績」と呼ばれる鹿児島紡績所については、絹川太一『本邦綿糸紡績史』など<sup>2)</sup>、戦前から取り上げられてきた。紡績技術史の立場からは、玉川寛治が内外の資料の博搜とそれに基づいた鋭い分析をなしている<sup>3)</sup>。また、経済史では加藤幸三郎が明治時代の経営状態を解明した<sup>4)</sup>。建築学的には、現存する異人館が初期洋風建築の一例として度々取り上げられるが、鹿児島紡績所の工場については石造洋風の外観が紹介される程度で、少し踏み込んだ内容としては、近藤豊が鹿児島紡績所の平面図を紹介している<sup>5)</sup>。

ここでは、洋式紡績工場の設立をめぐる薩摩藩とイギリス商人たちの活動をたどりつつ、平面・断面構成を国際的な視点から分析し、両者の相関について考察したい。

### 第1節 沿革

#### 1. 鹿児島紡績所建設前後における薩摩藩の紡績業

安政2～3 (1855～1856) 年頃、島津斉彬は指宿の豪商浜崎太平次献上の西洋糸を見て、藩の御庭奉行を務めた石河正龍に「将来日本ノ膏血ヲ絞ルモノハ實ニ此ノモノナリ汝宜シク拮据勉勵ニ當ルベシ」といい<sup>6)</sup>、綿糸紡績業を推奨した。同じく安政年間頃、斉彬は藩内にあった船舶数を調査させ、その結果、5,300余りの船舶の帆布は「皆上方ヨリ買下シ代價夥敷キ金高ナリシヨシ」といい、さらに「……御内命其帆ニモ國製ノ帆木綿可相用トノ御沙汰アリシト」あり<sup>7)</sup>。このことから、薩摩藩では従来紡績産業があまり盛んでなかったことを知ることができ

る。同時に、斉彬が紡績に力を注いだ契機の一つに帆布による対外赤字の減少という経済的事情があったことがわかる。

この斉彬は、磯別邸の隣地に工場群を建設し、安政4(1857)年には集成館と命名、ここでは各種の生産事業を実施する。事業は集成館以外の地でも推進され、水車を動力とした紡績工場である郡元水車館を安政3(1856)年に、田上水車館と永吉水車館を安政5(1858)年に建設した<sup>8)</sup>。ここで使用された機械は日本人が独自に製作したもので、当時の絵図によりその詳細を知ることができる<sup>9)</sup>。これらの工場も含め、幕末から明治初期にかけて行われた薩摩藩の近代的生産事業を集成館事業と総称している<sup>10)</sup>。

薩摩藩はさらに、泉州に堺紡績所を明治3(1870)年に開業し<sup>11)</sup>、上方市場をも視野に入れた本格的な事業展開を目指していたと考えられる。慶応3(1867)年創業の鹿児島紡績所での綿糸紡織業は安政年間からの集成館事業の延長上にある薩摩藩の主要事業の一つであった。

一方、鹿児島紡績所建設後の国内では、斉彬の予言通り、西洋綿糸の輸入量は増大の一途を辿り、在来産業をおびやかすようになった。明治政府は官営紡績所や十基紡などの紡績工場の整備にまい進し、その中で石河正龍をはじめとする薩摩藩の技術者は指導的役割を果たし、鹿児島紡績所は日本最初の本格的洋式紡績工場として高く評価されている<sup>12)</sup>。以下、この紡績所建設に至る経緯に詳しく検討を加える。

## 2. 鹿児島紡績所の建設経緯とイギリス資本および技術者の関与

鹿児島紡績所の建設経緯を記す史料として、イギリスのオールドハムに所在するプラット・ブラザーズ社(Platt Brothers & Co., 以下、プラット社)が1899(明治32)年8月15日に三井物産



図3-1 鹿児島紡績所跡の石碑(左側)と大正10年の紡績所碑文を記した石柱(右側)  
(背後の駐車場やコンビニエンスストアの周辺が鹿児島紡績所の跡地、手前入口両脇の笠石は鹿児島紡績所の門柱にあったもの)(2015年9月 筆者撮影)

倫敦支店にあてた書簡がある。この原本の所在は不明で、昭和11(1936)年に岩元庸造が抜粋した記述を残すのみである<sup>13)</sup>。よって、その作成目的等は不明である。しかしながら、記述にある機械発注日はプラット社側に残された受注書類<sup>14)</sup>や後掲する青焼き図面の作製年月日と一致する。また、書簡中にある留学生の苗字も一致している。よってここではその内容に一応の信を置いて論を進めたい。

なお、前章で詳述したように、慶応元(1865)年3月、新納久信、松木弘安、五代友厚、通訳の堀孝之ら薩摩藩留学生15名はイギリスへ出発、同地の工場視察や各種契約を行った。渡英にあたり、新納、松木、五代、堀の4名は、それぞれ順番に石垣鋭之助、出水泉蔵、関研蔵、高木正次と名前を偽っている<sup>15)</sup>。

1899(明治32)年のプラット社の書簡によると、同社はこの件にエド兄弟社(Ede Brothers)を通じて、1865(慶応元)年6月にかかわり始め、8月に3人の日本人、イシガキ(石垣)、シッキ(関)、タカケ(高木)の訪問を受けたという。この後、平面図と見積りが用意され、1866年1月9日(慶応元年11月23日)に最終計画図面が採択、紡績準備機械、紡績機械がプラット社へ発注された。力織機も同社から供給され、図面上では100台が配置されたが、1893(明治26)年4月に同社のH. エインレー(Henry Ainlay)<sup>16)</sup>が鹿児島を訪れたとき、31台のみが残り、全て稼働せず、隅に放置されていたという。力織機はストックポートのベリスフォード・エンジニアリング社(Berrisford Engineering)の製造、シャフトによる動力伝達機構(シャフティング)はマンチェスターのレン・ホプキンソン社(Wren & Hopkinson)が製造した。機械はレディー・アリス号により出荷、プラット社の技術者J. テットロー(John Tetlow)が同乗し、1866年7月9日(慶応2年5月27日)にロンドンを出航、1867年1月12日(慶応2年12月7日)に長崎へ到着している。

ところで、前章で指摘したとおり、この五代ら留学生一行の世話をしたのは長崎にいたイギリス人商人トーマス・グラバー(Thomas Blake Glover)であった。薩摩藩士のイギリス行きにはグラバー商会所有の船で渡り、同商会のR. ホーム(Ryle Holme)が同行している。紡績機械購入の代金はロンドンのマセソン商会(Matheson & Co.)より融資を受け<sup>17)</sup>、レディー・アリス号での機械運搬もマセソン商会と同商会の兄弟会社であるジャーディン・マセソン商会(Jardine, Matheson & Co., 以下、JM商会)が手掛けている<sup>18)</sup>。

このようなグラバー商会、JM商会の支援を受けて紡績工場の設備の手配が進む一方で、五代たちはコンテ・ド・モンブラン(Comte de Montblanc)というフランス系の商人と接触している。慶応元(1865)年8月にはブリュッセルで、白耳義商社という薩摩との合弁貿易商社を設立する締結を結ぶ。また、同年12月には各種の産業開発についても取り決めを交わしたらしく、蚕卵紙の輸出、鉱山開発、麻紡績の他、すでにグラバーとの合弁の事業が一部展開し、契約・施工中だった製糖事業、綿糸紡績事業へもモンブランの介入が予定されていたらしい<sup>19)</sup>。実際にはグラバーの干渉もあり<sup>20)</sup>、ほとんど計画は立ち消えになっているが、慶応3(1867)年8月、モンブランは金銀山開発のために地質学者を連れて来薩しており<sup>21)</sup>、一部は実現したもの